例会作品帳

◎平成二十五年四月二十日（第十七回）

（佐藤　紀之）

上山北中短歌歳時記「山なみ」より五首

学校もプラットホームの一つにて共鳴し合って夢の花咲く

これまでもこれからもある人の縁縁を生かして育つ人の世の命があるを元旦に問う

春空に蔵王の峰はきらきらと雲母のごとく巣立ち祝えリ

君にある未知なる自分の美しき種子咲かすため直向きに往け

挨拶と応援歌声溢れたる学舎の門君を待ってた

（佐藤　亮照）

冬眠の醒めてのそのそ「牛蛙」つつくカラスにあわてかけ寄る

特労で歌進むごとにこやかに変わる顔つきオカリナの音

六十路半父のその時想う時さぞ辛かりし老々介護

（佐藤　志亮）

今想う過ぎゆく時に足をとめ「不満が先か・・・。感謝が先か。」

（黒沼　貞志）

風邪に伏せ久方ぶりの夢の中亡母の十八番の懐かしき粥

見舞いの途車窓の先に白き富士思わず願う早き快癒を

嗚呼朋よ祝いの帰りの機内にて逝きし無念をいつか語らん

西の空きさらぎの朝月冴ゆる近づく弥生の別れと出会い

社へと続く参道雪うずみ鳥居を前に春を待つらん

突然に戻りし寒の雪背負い地蔵の肩も少し重たげ

突然の弥生末日のなごり雪山もひっそり斑雪かな

わらべらの喚声おちこち春彼岸すが張る花立清めて祈らん

アンソロジー畳んで了いし花筵「Collaborde 写歌」で再び拓かん

職求め人を求めて耐えて待つ流れし時間が世間を反映す

窓越しの朝光（ひかり）まといし木蓮にそっと「おはよう」ひとりごちする
リトグラフ傍らに添え春の花玄関装いて人を迎えん
シュンランに「また逢えたね」と声かける今年の山路春まだ浅し
アルジェリアの事件で詠みし二首
遠き地で散りし仲間の葬儀の報この地で祈る雪の朝凍む
三十路（みそじ）代われ滞在しキャンプ地は遥か昔の安全砂漠

（千葉　克明）

こぞの春寒暖の差よきびしきや梅と桜が競える悲哀
手ひねりで削り仕上げる楽（らく）茶碗それぞれ違う顔を見せ居（お）り
早や四歳理屈も言える知恵がつき祖父笑わす箱根の旅路
ピアノ弾く野球のプロ望む幼子（おさな）は力強（ちからづよ）くもやさしくもあり

（寺崎　秀也）

春来たり見せたかったな亡き人の好きだったあの桜の花を
庭園に流れ落ちたる水飛沫（しぶき）眺め良きかな菩提寺の滝
御本尊南無阿弥陀仏手を合わせ菩提供養す祈りを込めて
岩波の十一面の観世音真言唱え護摩を修（しゅう）す